英語中間構文と関連構文の非対称性について
―自己知覚の概念を中心に―

千昊載
（韓国啓明大学）

【要旨】本稿は自己知覚の概念が英語中間構文にどのように伴うかを関連構文（結果完了構文・非能格自動詞構文・能格構文）と比較し考察したものである。まず中間構文と関連構文には、エコロジカル・セルフ、観察点、知覚の公共性、そしてインターパーソナル・セルフによる自己知覚の概念が非対称的に適用されることを述べる。第 2 に、中間構文と関連構文との間でゼロ形の意味論制約が非対称的に、または不規則的に適用されることを述べる。第 3 に、見える客体（人称代名詞）を中心に中間構文と関連構文との間で自己客体化がどのように実現するかを述べる。第 4 に、社会的基盤という概念を中心に中間構文と関連構文との違いを述べる。最後に、記憶という概念を中心に中間構文と関連構文との違いを述べる。

キーワード: インターパーソナル・セルフ、ゼロ形の意味論、自己客体化、社会的基盤、観察者の記憶

1. はじめに

英語には(1a)のように、有生主語「Jane」の一般的属性の「scares easily」を記述する有生主語中間構文と、(1b)のように無生主語「My car」の一般的属性「drives easily」を記述する無生主語中間構文がある[1]。

(1)　a. Jane scares easily.
　　b. My car drives easily.

日本語にも(2)に見られるように、英語中間構文に対応する有生主語中間構文と無生主語中間構文がある。

(2)　a. 花子はちょっとしたストレスですぐ泣く。（千 2021c：15）
　　b. この本の表紙はすぐ破れる。（千 2021c：16）

[1] 以下では、英語と日本語ともに中間構文と略称する。しかし、両者を厳格に区別する場合はそれぞれ有生主語中間構文と無生主語中間構文と称する。例 (1)、(7) - (9)、(11b)、(13b) の英語例はすべて作例であり、筆者の大学に在職中の英語教育担当の教員から判定を受けた。しかし、判定の責任はすべて筆者に帰す。

英語の中間動詞は他動詞形であるのに対し、日本語の中間動詞は自動詞形であるという違いはあるものの、ともに主語の一般的特徴を表す点で共通点を持つと言われている（詳しくは 2 節で述べる）。

英語中間構文と日本語中間構文の文法的特徴（形態、統語、意味的特徴）を考察した研究は数多くあり、最近は英語と日本語中間構文の生態心理学的特徴を考察した研究も少しずつ見受けられるようになった。例えば、英語中間構文の場合は本多 (2013) と千 (2020、2021b) の研究が、日本語中間構文の場合は千 (2019ab、2021a) の研究が取り上げられる。

本稿では千 (2021b) で論じた日本語中間構文と関連構文（非能格自動詞構文・非対格自動詞構文）との自己知覚的非対称性を英語中間構文に援用することにより論を進めたい。具体的に言えば、「自己の直接知覚」「自己知覚・言語表現」「視座の移動と自己の客体化」「一人称代名詞の獲得の社会的基盤」「記憶や想像の中の自己」などに代表される「自己知覚」の概念を英語中間構文から徹底的に見出すことにより、英語中間構文が関連構文（結果完了構文・非能格自動詞構文・能格構文）と区別される独立構文であることを新たに主張したい。

2. 英語と日本語中間構文の文法的特徴

この節では、先行研究により明らかになった英語と日本語中間構文の文法的特徴（形態的・統語的・意味的特徴）をまとめる。

2.1. 英語中間構文

原口・中村 (1996 : 304) によると、英語中間構文(無生主語中間構文)の文法的特徴は次のようにまとめられる。(i) 英語中間構文の動詞、すなわち中間動詞は対応する能動構文の他動詞形と同形を取る。(ii) 中間構文の主語は対応する能動構文の目的語である。(iii) 中間構文の主語には被動作主 (patient) の意味役割が与えられる。(iv) 中間構文は主語の一般的属性を記述する総称文である。そこで中間構文に与えられる時制は単純現在であり、その帰結として中間構文では特定の出来事を指し示す要素が生じ得ない：?*The clothes are *ironing* well at the moment. (v) 中間構文は難易の意味をもつ副詞(句)、否定辞、法助動詞などと共起する傾向が高い：The coat wash *with no trouble*./ The lightweights *don't* knock out./ The floor just *won't* clean. (vi) 中間動詞は動作動詞に限られることから、中間構文では（一般的）動作主が含意される。

2.2. 日本語中間構文

以下で挙げる説明と例はすべて千(2021c : 16-17)から引用した。まず (2) に見られる

ように、日本語中間動詞は非能格自動詞と非対格自動詞と同じ形を取る。第2に、日本語中間構文の統語形式は「個別主語（指示語＋名詞）＋主題格助詞ハ＋副詞（句）＋動詞（句）」という配列で示される。第3に、日本語中間構文では対応する能動構文の目的語（被動作主）が主語となる。第4に、日本語中間構文には動作主が統語上実現しえないが、意味上「われわれ、誰でも、誰もが」のようにその存在が含意される。第5に、日本語中間構文には難易副詞「容易く」や様態副詞「すぐ」、副詞句「些細なことで」などが必須的に生ずる。第6に、日本語中間構文は状態化の操作を受けるために述部の中間動詞は状態動詞となる。その根拠として日本語中間構文には命令形、進行形、動作主志向の副詞などの要素との共起制約が生じる。最後に、日本語中間構文は主語に内在する一般的属性を記述する。

以上が日本語中間構文の文法的特徴であるが、日本語中間構文に関連した先行研究としては寺村 (1992)、中右 (1991)、吉村 (1995) が挙げられる。寺村 (1992 : 271-284) では自動詞と他動詞のなかの一部の動詞形、例えば「割れる、抜ける、見える、切れる、折れる」などの動詞が主体の存在を問わないばかりか、あるいはその存在を意識せず主語があたかも自然に、ひとりでに状態変化したことを表す自発態の動詞が英語の中間態的な概念に当たると述べている。しかし寺村 (1992 : 271-284) が主張する自発態の動詞は本節で述べる中間動詞の文法的特徴が必ずしも当てはまらないと限らないことから、自発態の動詞は中間動詞と区別されなればならない（具体的な例の提示は省略する）。中右 (1991 : 62-63) は日本語では中間構文を例示する「このごみは水道管には流せない」に見られるように中間態と可能態の動詞が同形を取るにもかかわらず、この文の動詞「流せる」が他動詞「流す」を含んでいること、動作主体が含意されていることから全体として総称的解釈を受けるとする。このことから中間態を可能態から切り離すことが必要であるとした。吉村 (1995 : 249-252) は日本語には英語中間構文に当たる属性文（中間構文という用語を用いていない）があり、可能文の一種としてみなしている。しかし、日本語に中間構文が存在する可能性についてははっきり述べていない。そのほかに日本語には自動詞と他動詞が同じ形態で自動詞とも他動詞とも用いられる自他同形動詞を考察した研究が挙げられる（具体的な提示は省略する）が、「形は能動、意味は受動」である動詞はその数が極めて限られており、英語中間構文に相当する文法的特徴については述べていないことから、日本語に中間構文が存在する可能性を言及した論考は筆者の管見のかぎり、中右 (1991) 以外にはほぼ皆無に近い。日本語に中間構文が存在するという本稿の主張はこのように中右 (1991) に負うところが大きいが、中右 (1991) の論考は英語中間態に相当する中間態の動詞が日本語にも見られることを指摘するにとどまっており、千 (2021c) のように詳細に考察してはいない。

日本語に中間構文が存在するという本稿の主張に対して、以下のような反論が予想されるために少し述べておこう。英語の中間動詞が「形は能動、意味は受け身」である

と知られるように、英語中間構文とは能動態と受動態の中間ということで、そのように呼ばれるタイプの被動作主主語の文である。さらに、日本語には被動作主を主語にする場合の動詞として、動作主主語の他動詞と完全に同じ形で動詞が使われる自他同形の動詞の存在が極めて限られている（例：「開く（ひらく）」「閉じる（とじる）」）ため、被動作主主語の動詞は動作主主語の動詞と同形にならず日本語に中間構文は存在しないという反論が予想される。また (2a) は中間構文の定義にはあてはまらないという反論が予想されるが、というのは、主語の「花子」は動作主の意味役割が与えられると解釈されうるからである。また、無生主語をとる (2b) の動詞「破れる」は自動詞であって、決して他動詞「破る」ではない。したがって、これらを中間構文と呼ばずに単に「有生（無生）主語自動詞文」と呼べばいいだろうという反論が予想される。

この反論は千 (1998) の博士論文でも述べたように、日本語には中間構文の述語の中間動詞が自動詞形や可能動詞形と同形を取るために、中間動詞は自動詞や可能動詞の持つさまざまな用法の一用法に過ぎないという主張に似ている。しかし本稿では、千 (2009) の研究以降から主張してきているように、日本語中間構文が英語とほぼ同様の文法的特徴を持つことから「日本語には中間動詞が存在する」という立場をとる。さらに仮に中間動詞が可能動詞形と同形であれば、その中間動詞は可能動詞形と同音異形であり、自動詞形と同形であれば、その中間動詞は自動詞形と同音異形であると考える。

この考え方の妥当性は (2a) の主語「花子」が動作主ではなく被動作主であること、(2a) が上記した文法的特徴をもっぱら有すること、仮に (2) を単に「有生(無生)主語自動詞文」とすると、上記した文法的特徴を有しない自動詞文も数多くあることから裏付けられる。このことは「合わせる」「待たせる」のように、同じ「動詞の語幹＋使役助動詞」形を取ってもそれぞれ「他動詞：使役動詞」「単文構造：複文構造」「直接使役：間接使役」の対立が見られること[2]、英語中間動詞が能格動詞と同形であっても統語的にも意味的にもそれぞれ異なるために、中間構文を能格構文から区別される基本構文とみなすことと軌を一にする。

3. 自己自覚の理論的背景

生態心理学の中心理論である「自己知覚」の概念は、本多 (2013 : 13-46) によると以下のようにまとめられている。

自己知覚とは知覚者自身の視野の中に含まれる対象（無生物・有生物）の状況や属性を知覚することである。自己知覚は (i) 自己の直接知覚、(ii) 自己知覚と言語表現、(iii) 視座の移動と自己の客体化、(iv) 一人称代名詞の獲得の社会的な基盤、(vi) 記憶と想像の中の自己 5 つに分けられる。

[2] 詳しくは千(1998、2009、2012)を参照のこと。

まず、自己の直接知覚とは、知覚者自身の視野の中に含まれる対象を直接知覚することであるが、さらにこれにはエコロジカル・セルフ、観察点や知覚の公共性と属性、インターパーソナル・セルフ、直接知覚される自己：エコロジカル・セルフとインターパーソナル・セルフの統合に細分化される。エコロジカル・セルフとは知覚者自身のものの状況や属性から直接知覚される自己のことを言う。観察点とは、ある環境の中で対象を知覚する知覚者の物理的・観念的位置のことを言う。ある観察点とそこから得られた知覚情報は、他人と共有が可能であるために公共性を持つとされる。共有された観察点と知覚により、ある対象に組み込まれている属性が現れ出るとされる。インターパーソナル・セルフとは、知覚者と他人とのかかわりから直接的に知覚される自己のこと言う。直接的に知覚される自己はエコロジカル・セルフとインターパーソナル・セルフとの統合により実現する。

第 2 に、自己知覚と言語表現とは、前述した自己の直接知覚が言語表現に何らかの形で反映されることである。これはまずエコロジカル・セルフが音形のある言語形式により反映されないこと（例えば「Vanessa is sitting across the table」や「国境を越えると道が広くなった」では知覚者の存在は意味的に含意されるが、それを音形のある言語形式で示すことはできない。ゼロ形の意味論制約と呼ばれる）、「ここの水は酸っぱい」に見るように、観察点の拡張と共有により知覚者の存在が総称的に解釈されること、「本当ですか」「まじ？」のように丁寧な表現を使うかどうかによりそれぞれ異なった対人関係の中で知覚される自己、すなわちインターパーソナル・セルフが個別的に反映されることなどから裏付けられる。

第 3 に、視座の移動と自己の客体化とは、視座の移動により自己の客体化が起こることである。ここで言う視座とは観察点（見る主体・見られる対象・見る場所・見える範囲・見える様子など）を言う。つまり、有生主語を使うか無生主語を使うか、主語が一人称代名詞かどうか（すなわち、一人称代名詞を音形のある言語形式で示すかどうか）により視座が移動したりしなかったり、自己の客体化が起こったり起こらなかったりするものである。例えば「国境の長いトンネルを抜けると雪国であった」で言えば、視座の移動と自己の客体化は実現しないが、英訳文の「The train came out of the long tunnel into the snow country」では視座の移動と自己の客体化が起こる。すなわち、後者の英語文では前者の日本語文とは異なる運動・位置関係・状態変化が生ずるとされる。

第 4 に、一人称代名詞の獲得の社会的な基盤である。例えば「Vanessa sitting across the table from me」を見ると、一人称代名詞「me」が示されているが、このことは自己（知覚者自身）と環境の中に存在する対象と同様の扱いが可能な社会的基盤を前提とすることである。この概念の妥当性は「チンパンジーの自己鏡映像認知」と「他者の視座の獲得、インターパーソナル・セルフ、一人称代名詞（自己を視野の中に置くこと）」という下位概念により裏付けられるとする。

最後に、記憶（想像）の中の自己である。記憶には「エピソード記憶」と「意味記憶」があるとされるが、前者は特定の時点に発生した出来事（経験）についての記憶である。これに対し、後者はものの名称や法則、規則などのような学問的知識についての記憶である。前者のエピソード記憶にはさらに知覚者（観察者）の記憶（観察者の視点から過去の観察者自身を含むシーンについての記憶）と視野の記憶（過去の出来事を同じ視座に立って記憶すること）があるとされる。例えば、「Vanessa is sitting across the table from me」は観察者の記憶によるものであり、「Vanessa is sitting across the table」は視野の記憶によるものであるとされる。

第 5 節では、上記に挙げた日本語中間構文と同様に生態心理学の中心理論である自己知覚の概念を英語中間構文からも見いだせるか、ひいては日本語中間構文の分析では決して捉えられない有意味な何かが見いだせるかを見てみたい。

4. 自己知覚に関連した英語と日本語中間構文の先行研究

本節では自己知覚にもとづき、英語中間構文を分析した本多（2013)の研究と日本語中間構文を分析した千 (2021c) の研究を検討する。

4.1. 本多 (2013)

以下の節では、生態心理学の中心理論である自己知覚の概念にもとづいて英語中間構文を分析した本多 (2013：65−116) の考察について、私見を加えて見てみよう。まず第 1 に、自己の直接知覚である。例えば中間構文では特定の動作主を「by」前置詞句で示せず、動作主の存在のみが含意されることから、中間構文ではエコロジカル・セルフという自己知覚が伴うとする。さらに中間構文の主語の一般的属性を知覚するものは意味的に含意されている動作主・話し手などを含めたあらゆる人と解釈されることから、中間構文では観察点・知覚の公共性という自己知覚が伴うとされる。第 2 に、中間構文では動作主を「by」前置詞句では明示できないが、「for」前置詞句では明示できることから、中間構文は知覚者の知覚経験を記述する構文であるとする。

本多 (2013) の研究は英語中間構文を構成する諸形式が与える解釈（表現解釈の意味論）のみにとどまらず、知覚者がどのような対象をどのような方式で捉えるか（捉え方の意味論・認知意味論・生態心理学）といった、すなわち中間構文を成立させる諸要因が働く深淵を知覚者と対象が存在する環境の中で見つけ出そうとしたところに最大の特徴がある[3]。

[3] 本多 (2013：41) によれば認知意味論と生態心理学は「捉え方」の意味論として共通点を持つが、後者の生態心理学は話し手が同じ出来事（状態）を記述する可能性のある複数の文のいずれかを選ぶことから、話し手の位置関係にかかわる情報までキャッチできるという点でその特徴があるとする。

本稿では本多 (2013) のように表現解釈の意味論では捉えきれない中間構文を生態心理学的観点（自己知覚的観点）でより精緻に捉えたいという立場に立っている。ただし、本稿では幾つかの点で本多 (2013) の意味観をより充実した形で補いたい。まず、本多 (2013) の研究では中間構文を有生主語中間構文と無生主語中間構文とに積極的に区別していないために、インターパーソナル・セルフという自己知覚が中間構文に伴うという事実を述べていない。さらに本多 (2013) は有生主語中間構文と無生主語中間構文の存在について述べられていないために、生態心理学で言うエコロジカル・セルフとインターパーソナル・セルフとの統合が中間構文で実現する可能性について全く触れていない。第 2 に、本多 (2013) とは異なり、本稿では中間構文こそゼロ形の意味論制約（知覚者の視野の中に知覚者を指し示す一人称代名詞を音形を持った名詞句で明示できないという制約）が随意的に適用され得ること、中間構文で視座の移動による自己の客体化がどのように実現するかについて具体的に述べていない。第３に、本多 (2013)　は中間構文の主語を取る人称代名詞や、それに伴う社会的基盤についても具体的に述べていない。第 4 に、本多 (2013) は中間構文がエピソード記憶により得られるか、意味記憶により得られるかについても全く述べていない。最後に、本多 (2013) は中間構文と連結的知覚動詞構文（例えば「That sound reasonable」）と主体移動表現(例えば、「The road runs straight」）との自己知覚の概念の並行性については十分に述べているが、有生主語中間構文と無生主語中間構文に形態的・統語的・意味的に類似している非能格自動詞構文(例えば、「John runs」）や、状態変化構文（例えば「The door opened」、本稿では能格構文と呼ぶ)については自己知覚的観点で徹底的に述べていない。「出来事の見え」「動作主性」などの用語を使って多少区別を試みてはいるが、両構文の違いを十分に述べているとは言えない。

4.2. 千 (2021b)

千 (2021b) では前述した自己知覚の概念を援用し日本語中間構文を分析した。以下で挙げる例や説明はすべて千 (2021b) による。まず、自己の直接知覚であるが、例えば「この陶器は容易く割れる[4]」を知覚した知覚者は「この陶器に距離を置く」というエコロジカル・セルフが伴うとする。さらに上記した主語の一般的属性はさまざまな観察点や知覚者により知覚されるために観察点と知覚の公共性が保たれるとする。また「う

[4] 査読者から筆者の作例による日本語ばかりでなく、実際の（母語話者によるコーパスなどを援用した）日本語の用例が充実していると、より説得力が増すというコメントをいただいた。ご指摘の通りであるが、本稿は英語中間構文の考察に主眼点を置いており、日本語の例はすべて千 (2022b) から引用していること、最後には日本語中間構文に当たる例がコーパス上でなかなか見つからないことから査読者のご意見を反映できないことをどうかご了解いただきたい。自動詞構文はコーパス上でかなり見つかる傾向を見せる反面、中間構文はそうではないことは中間構文の生成が日本語母語話者の内省に頼るところが大きいことを示唆すると考える。

ちの赤ちゃんはすぐ泣く」で言えば、主語「赤ちゃん」に対する自己知覚は、主語との身体的・精神的接触により得られることからインターパーソナル・セルフが伴うとする。さらに中間構文には有生主語中間構文と無生主語中間構文が存在することから、事物と人間という二項関係が互いに影響を及ぼしあう方式で自己知覚が伴うとする。第 2 に、中間構文では知覚者の存在は意味的に含意されるのみならず、「私はむざむざと悪計によくかかる」に見るように、一人称代名詞「私」を音形のある言語形式で示すことができることから、ゼロ形の意味論は中間構文では当てはまらないとする。このことは中間構文が他者を見るように話し手自身の属性を知覚し記述できるからであるとする。第 3 に、中間構文、例えば「あの社員はよく働く」に「見る主体：知覚者」「見える客体：あの社員」「見える場所：事務室」「見える範囲：360 度」のように視座の概念を当てはめることができるとする。さらに「花子（→君→僕）はすぐ泣く」に見るように人称代名詞の選択に制限がないことから、中間構文では視座の移動と自己の客体化が実現するとする。第 4 に、例えば「あの子供はインフルエンザによくかかる」のような中間構文は、知覚者が他者「あの子供」への共感能力や普段の関心がなければ成り立たないために、中間構文の成立には他者に対する知覚者の社会的能力が必須的に要求されるとする。最後に、「智子は小さなことでもよく喜ぶ」に見るように、この文にはさまざまな日常の経験を反復的に知覚する知覚者が意味的に含まれていると解釈されることから、有生主語中間構文は観察者の記憶により得られる文であるとする。

以上のような日本語中間構文の自己知覚的特徴は形態・統語・意味的に類似している非能格自動詞構文や非対格自動詞構文にはほとんど当てはまらないことから、中間構文と非能格自動詞構文、中間構文と非対格自動詞構文との間では自己知覚的非対称性が生ずるとする。

第 5 節では、日本語中間構文に適用される自己知覚の概念が英語中間構文にも当てはまるか、また当てはまるとすると英語中間構文と形態・統語・意味的に類似している関連構文（結果完了構文・非能格自動詞構文・能格構文）との違いをどのように説明できるか見てみたい。

5.「自己知覚」にもとづく英語中間構文の分析

この節では、自己知覚による英語中間構文（有生主語中間構文・無生主語中間構文）と関連構文（結果完了構文・非能格自動詞構文・能格構文）との非対称性を考察することにより、英語中間構文が関連構文と区別される基本構文であることを主張する。

5.1. 自己の直接知覚と中間構文

まず、エコロジカル・セルフという概念から英語中間構文の自己知覚的特徴を見てみよう。

(3)　a. This door opens easily.　（本多 2013：106）
　　b. The door opened.　（本多 2013：106）
(4)　a. Sue frightens easily.　(Iwata 2001：61)
　　b. She was very frightened to look down from the top floor of the building.
　　<weblio> https://ejje.weblio.jp/content/frighten（閲覧日：2022.7.16）

まず、(3a) から分かるように、このドアが容易く開くと知覚者が知覚するかたわら、知覚者（消費者）がこのドアの優先的購入、あるいはこのドアを通して特定人を案内するというエコロジカル・セルフが伴うと考えられる[5]。これに対し、(3b) の能格構文からは主語の状態変化をそのまま記述することに主眼点が置かれると解釈できるため、エコロジカル・セルフが伴うかどうかは副次的なものだと考えられる。(4a) は主語が人間なのでエコロジカル・セルフという概念は最初から排除される。本稿では後述するが、(4a)は有生物を主語と取るためにインターパーソナル・セルフが伴うと考えている。

第 2 に、観察点と知覚の公共性と属性による自己知覚である。(3a) で言えば、容易く開くドアの属性は、さまざまな観察点（空間）と複数の知覚者により知覚できることから中間構文には観察点と知覚の公共性が伴うと考える。(4a) に対しても同様のことが言える[6]。これに対し、(3b) の能格構文や (4b）の結果完了構文[7]の記述する主語の属性は特定の観察点と知覚者にしか知覚できないと解釈されるため、これらの構文には観察点と知覚の公共性と属性による自己知覚が伴うとは考えられない。

第 3 に、インターパーソナル・セルフによる自己知覚である。(4a) が記述する内容は有生主語と知覚者との日ごろの人間関係を通し獲得されたものであり、この知覚内容から知覚者（動作主や聞き手)が有生主語へどんな行為を取るかに重点が置かれると解釈するのが一般的である。つまり、驚きやすい相手の知覚情報を土台に知覚者は相手を意図的に驚かせるか、あるいは驚かさないためのさまざまな（発話)行為を考慮するかという自己知覚が義務的に伴うということである[8]。これに対し、(4b) の結果完了構文はインターパーソナル・セルフによる自己知覚は随意的であると考えられる。

最後に、以上の分析から (3a) と (4a)　は 「もの」と「人」への知覚が脳内に蓄積され、再びそれが知覚者の自己知覚へ還元されるといった、つまりインターパーソナル・セルフとエコロジカル・セルフが常に統合される形で知覚されるとする生態心理学理論の妥当性を強力に支持するものと考えることができる。これに対し、(3b) と (4b) は

[5] この説明は千 (2020：84-87) と千 (2021c：22-23) により支持される。
[6] より詳しくは千 (2020：88) を参照せよ。
[7] 受動構文と結果完了構文との類似性に関しては寺澤 (2002:87-108) を参照せよ。
[8] このことは千 (2021c：25-26) の研究に負うところが大きい。千 (2021c：25-26) ではこの解釈が知覚とアフォーダンスとの循環性から起因すると述べている。

主語への知覚情報が必ずしも知覚者の自己知覚へと還元されるとは限らないので、両者の統合が実現すると考えられないかまたは考えにくい[9]。

5.2. 中間構文における自己知覚の表現構造

すでに述べたが、日本語では「私はむざむざと悪計によくかかる」のように、主語を一人称代名詞「私」を音形のある言語形式で示すことができるために、ゼロ形の意味論制約は日本語中間構文では適用されないとされる。

これに対し、次の (7b) に見られるように英語中間構文では知覚者自身を音形のある言語形式で示すことはできず、(7c) のようにもっぱら結果完了構文にしか表現できない[10]。

(7)　a. Jane discourages/amuses/excites easily.
　　b*I discourage/amuse/excite easily.
　　c. I am discouraged/amused/excited easily.

このことから、英語中間構文ではゼロ形の意味論制約が厳格に適用されると考えることができる。これは換言すれば、(7c) の結果完了構文ではゼロ形の意味論制約が随意的に適用されるということである。広瀬・加賀 (1997: 54) によれば、話し手が自分自身を見る方法として「他人を見るように自分自身を見る方法」と「他人の観点から自分自身を見る方法」があるとされるが、このことから考えると、英語中間構文ではどちらの観点も許容されない反面、英語の結果完了構文ではどちらの観点も許容できるということになる。

この考え方は (7c) の結果完了構文から話し手自身が写った動画や写真を見ている状態を記述しているとは解釈されないことからも支持される。

5.3. 視座の移動・自己客体化と中間構文

次の例 (8a) と (8b) を見ると、主語の選択において三人称は許容されるが、二人称は許容されないことがわかる。

(8)　a. That Woman discourages/amuses/excites easily.
　　b*You discourage/amuse/excite easily.
　　c. You're discouraged/amused/excited easily.

---

[9] この解釈は千 (2021c：22-23) に負うところが大きい。

[10] 例 (7) と (8) の解釈は筆者の大学に在職中の英語教育担当の教員からの判定による。しかし、解釈の責任はすべて筆者に帰す。

(8a) を視座の概念にもとづいて言えば、知覚主体（知覚者）は主語の属性を知覚する人である。「見える客体」は主語や主語に内在している一般的属性である。「見える場所」は主語の一般的属性が知覚され得る不特定の空間である。すなわち、主語の属性はどんな空間でも知覚できる。「見える範囲」は主語の一般的属性が知覚され得る不特定の範囲である。すなわち、主語の属性はどんな方向からでも知覚され得る。「見える様子」は主語の属性にかかわる一連の行為である。例えば、大声で叫ぶ行為・あばれる行為・発作・泣く行為などはすべて興奮にかかわる主語の行為とみなされ得る。

しかし、(8b) と (7b) を見れば英語の中間構文では (8c) と (7c) とは異なり三人称代名詞から二人称代名詞や一人称代名詞へ視座の移動が許されないことが分かる。すなわち、中間構文の取るすべての主語は三人称代名詞のみに限られる。このことから、中間構文では視座の中で「見える客体」が三人称代名詞のみに固定されるため、見える客体による自己客体化は起こらないと考えることができる。

これに反して、次の (9)〜(11) の無生主語中間構文、能格構文、非能格自動詞構文や (7c) や (8c) の結果完了構文では指示語や人称代名詞の選択に変化が許容される。このことから、これらの構文では見える客体に限って自己の客体化が生ずると考えることができる。

(9)　a. That tract handles easily.
　　b. This tract handles easily.
(10)　a. This ship sank.　（吉村 1995：261）
　　b. That ship sank.
(11)　a. The man in the train kept sneezing.
　　b. Someone must be talking about you because you just sneezed.
　　c. I sneeze a lot.
　　a〜c の引用先：https://ejje.weblio.jp/content/sneeze　（検索日：2022.02.04）

5.4. 一人称代名詞の獲得の社会的基盤による非対称性

すでに見たように、英語中間構文（有生主語中間構文）では主語を一人称代名詞や二人称代名詞で示すことができず、もっぱら三人称代名詞のみが主語となり得ることから、英語中間構文は知覚者と他者（第三者）との身体的・精神的接触を可能にする社会的基盤の上で成り立つ構文であることが分かる。例えば、(8a) で言えば、主語の一般的属性「discourage/ amuse/ excite」は主語「That woman」との普段の触れ合いから得られた知覚者の社会的能力（人間観察能力・共感能力など）の顕現としか考えられない。これに対し、関連構文の非能格自動詞構文においては主語の選択に特別な制限がない。例えば、(11) を見ると、非能格自動詞構文では主語を自由に選択できるために、知覚者と

他者が社会的基盤を共有すると考えられるが、一方、(11a) の主語「The man」が知覚者にとっては未知の人であるとすれば、知覚者と主語とは互いに社会的基盤を共有しないとも考えられる。

このことから、英語中間構文において知覚者と他者は社会的基盤が必然的に要求されるのに対し、非能格自動詞構文においては必ずしもそうとは限らないと考えることができる。

5.5. 記憶と想像の中の自己による非対称性

5.1 節で見たように、英語中間構文にはインターパーソナル・セルフが伴うということは、有生主語の属性を知覚する現場に常に知覚者自身が含まれており、さらに中間構文では知覚者と主語との情動的なつながりが前提とされていることを意味する。このことから英語中間構文（有生主語中間構文）は観察者の記憶により得られると考えることができる。つまり主語の属性を反復的に知覚する場面の中に知覚者の知覚が含まれているということである。以下の例に対しても同様の解釈ができる。

(12)　a. She persuades easily.　(Koizumi 2001：144)
　　b. Mary wakens easily.　(Koizumi 2001：140)
　　c. My fighter doesn’t knock out easily.　(Koizumi 2001：139)
　　d. Harry seduces easily.　(Iwata 2001：63)
　　e. He insults easily.　(Iwata 2001：63)
　　f. John puzzles easily.　(Iwata 2001：67)
　　g. John delights easily.　(Iwata 2001：67)
　　h. John thrills easily.　(Iwata 2001：67)

(9) の無生主語中間構文においてはエコロジカル・セルフが伴うという違いはあるものの、有生主語中間構文とともに知覚者自身が含まれると解釈されるという点で、有生主語中間構文と無生主語中間構文はともに観察者の記憶により得られると考えられる。

これに対し、(13) の非能格自動詞構文と (14) の能格構文は観察者の記憶ではなく、視野の記憶や意味記憶により得られると考えられる。

(13)　a. The man in the train kept sneezing. (= 11a)
　　b. Winston Churchill in the train kept sneezing.
(14)　a. Ice melts at zero degrees Celsius.
　　b. The sugar melted into a sticky pool.
　　https://ejje.weblio.jp/content/melt（閲覧日：2022.02.05）

例えば、(13a) の非能格自動詞構文の記述する主語の属性情報源は知覚者の体験から得られたと考えられるが、インターパーソナル・セルフやエコロジカル・セルフが伴わないと解釈されるため、視野の記憶により得られたと解釈される。さらに (13b) や (14) は知覚者が直接経験できない、すなわち百科事典や伝記などを通さずには得られにくい知識であるため、これらの例はすべて意味記憶により得られるたものと解釈される。

6. おわりに

今まで生態心理学の中心理論である自己の直接知覚にもとづいて、英語中間構文と関連構文（結果完了構文・非能格自動詞構文・能格構文）の特徴を述べてきた。以下、英語中間構文のみに注目しその特徴をまとめる。

まず、中間構文にはエコロジカル・セルフや観察点と知覚の公共性とインターパーソナル・セルフによる自己知覚の概念が伴う。有生主語中間構文と無生主語中間構文は、インターパーソナル・セルフとエコロジカル・セルフとの統合を支持する典型的な言語現象となり得ることが明らかになった。これに対し、関連構文には中間構文で見られるようなこれらの諸特徴は見い出せないか見い出しにくい。

第 2 に、日本語中間構文とは異なり、英語中間構文ではゼロ形の意味論制約が厳格に適用される。このことから、英語では中間構文を通しては他人を見るように自分自身を見ることや、他人の観点から自分自身を見るといった発想は存在しないことが明らかになった。ゼロ形の意味論制約は非能格自動詞構文や能格構文にも見い出せることが分かった（しかし、結果完了構文にはゼロ形の意味論的制約は守られない）。

第 3 に、英語中間構文の取るすべての主語は三人称代名詞のみに限られることから、見える客体のみによる自己の客体化は起こらないことが明らかになった。これに対し、能格構文・非能格自動詞構文・結果完了構文では指示語や人称代名詞の選択に変化が許容されることから、これらの構文には見える客体に限って自己の客体化が生ずることが分かった。

第 4 に、英語中間構文は知覚者と他者（第三者）との身体的・精神的接触を可能にする社会的基盤の上で成り立つ構文であることが明らかになった。反面、非能格自動詞構文では主語の選択に特別な制限がないことから、知覚者と他者との社会的基盤が必ずしも必然的に要求されるとは限らないことが分かった。

最後に、英語中間構文は主語の属性を知覚する現場に常に知覚者自身が主語との情動的なつながりがあることが前提とされるために、英語中間構文は観察者の記憶により得られるが、非能格自動詞構文と能格構文は視野の記憶や意味記憶により得られることが分かった。

以上、述べてきたように、英語中間構文と関連構文との間で自己知覚の概念が非対称的に示されることから、英語中間構文は基本構文であり、自己知覚は中間構文や関連構

文のような構文の研究にかなり有効な分析手段となり得ると考えることができる。

参考文献

千昊載 (1998)『意味条件にもとづく文構造の研究』東北大学大学院文学研究科博士学位請求論文.

千昊載 (2009)『中間構文の個別言語分析および凡言語的分析』ソウル：韓国文化社.

千昊載 (2012)『意味受動化操作の普遍的特徴 』ソウル：韓国文化社.

千昊載 (2019a)「認知意味論的観点から見た日本語の中間構文の研究」『日語日文学研究』第 109 号, 133-156.

千昊載 (2019b)「認知言語学の基本的言語観にもとづく日本語の中間構文の研究の必要性」『言語学論集』第 28 号, 15-29.

千昊載（2020)「英語中間構文の生態心理学的特徴－日本語中間構文の分析をベースにして－」『言語学論集』第 29 号, 77-92.

千昊載 (2021a)「探索行為とアフォーダンスに動機づけられた日本語の中間構文と関連構文の研究－非能格構文、自発構文との比較を中心に－」『日語日文学研究』第 116 号, 3-35.

千昊載 (2021b)「日本語ヴォイス構文の自己知覚的非対称性に関する研究－中間構文、非能格自動詞構文、非対格自動詞構文を中心に－」『日本語文学』第 94 号, 251-280.

千昊載 (2021c)「自己知覚に動機づけられた日本語と英語中間構文の言語的現象－探索行為とアフォーダンスを中心に－」『言語学論集』第 30 号, 15-30.

寺澤盾 (2002)「英語受動文」『認知言語学I：事象構造』東京：東京大学出版会.

寺村秀夫 (1992)「3. 自発態」『日本語のシンタクスと意味 I 』くろしお出版.

中右実 (1991)「中間態と自発態」『日本語学』第 10 号 2 巻：52-64.

原口庄輔・中村捷 (1996)『チョムスキー理論辞典』東京：研究社出版.

広瀬幸生・加賀信弘 (1997)「第 2 章 観察者としての話し手とその視点」『指示と照応と否定』東京：研究者出版.

本多啓 (2013)『アフォーダンスの認知意味論-生態心理学から見た文法現象』東京：東京大学出版会.

吉村公宏(1995)『認知意味論の方法-経験と動機の言語学』京都：人文書院.

Iwata Seizi (2001) “Where does Sue Frightens Easily come from?”『意味と形のインターフェイス 上巻』くろしお出版.

Koizumi Naoshi (2001) “Human Subjects in the Middle Construction”『意味と形のインターフェイス 上巻』くろしお出版.

A study on asymmetry in English middle construction and related construction: Focused on Self-Perception of Ecological Psychology

Cheon, Ho-Jaee

【**Abstract**】This paper examines how self-perception appears in English middle verb constructions by being compared to related constructions such as resultative perfect, unergative intransitive, or ergative constructions. First, it argues the self-perception is asymmetrically applied to middle verb constructions from the perspectives of the ecological self, the observation points, the publicness of perception, and the interpersonal self. The paper also investigates if the semantic constraints of the zero morph are accepted asymmetrically or irregularly. Then, how self-objectification is represented between middle verb constructions and the related constructions is argued with a focus of personal pronouns. At last, the paper discusses the differences between the middle verb constructions and the related constructions with a focus of the memory concept as well as the social foundation.